In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University marge to Osaka Metropolitan University

Title	空間・場所・ジェンダー関係 ： 第 2 部 ： アイデンティティ、差異、フェミニスト幾何学と地理学
Author	マクドウェル, リンダ / 影山, 穂波[訳]
Citation	空間・社会・地理思想. 3 巻, p.47-59.
Issue Date	1998
ISSN	1342-3282
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学文学部
Description	<特集>ジェンダー地理学 / Progress in Human Geography, 17-3, 1993, pp.305-318. / ©1997 by Edward Arnold
DOI	

Placed on: Osaka City University

Osaka Metropolitan University

空間・場所・ジェンダー関係：第2部

―アイデンティティ、差異、フェミニスト幾何学と地理学―

リンダ・マクドウェル*
（影山 穂波** 訳）

Linda McDowell
Space, place and gender relations: Part II.
Identity, difference, feminist geometries and geographies
Progress in Human Geography, 17-3, 1993, pp.305-318.
© 1997 by Edward Arnold

I はじめに

ある学問分野の発展を展望することは、決して容易なことではない。Nicky Gregson (1992) は、本誌 (Progress in Human Geography) に掲載された社会地理学に関する最近の展望論文において、将来を展望する人たちがこの作業を企図するのにしばしば感じていることを言葉にしている。「このように幅広く、急速に細分化しつつある分野に関して、どのように Progress Report（展望論文）を書いたらよいのだろうか」(p. 387)。「流砂のように漂う社会地理学」という彼女の展望論文の副題は、（人文）地理学を支配してきたであろう断片化と不確かさを強調している。フェミニスト地理学もそうした傾向から免れえないのである。結果として、フェミニスト地理学の展望論文であるこの第2部は、地理学の諸分野に共通するアプローチや視点の複雑さ、多様性、推移を反映している。実際、広く社会科学や人文科学全般においても、古くからの学問領域の境界が破られ、消滅しつつある。フェミニズム研究におけるのと同様に、「フェミニスト地理学」という名称に含まれる領域は、きわめて多様で多元的な内容であるため、ただひとつの視点として定義することは、ますます不正確になっている（Penrose et al., 1992）。以下では、この複雑さを指摘することを試みる。ただしこれは年代を追った記述のように読めるかもしれない。さらに将来の研究にとって重要な領域であると私が考えていることの概要を描く。もっともこれには、つねに危険をともなうが。

フェミニスト地理学の流れを記述した第1部では、三つの認識論的見地、あるいは思想の潮流がフェミニズム研究を区別してきたことを示唆した。すなわち、合理主義あるいは経験主義フェミニズム、反合理主義あるいはフェミニストスタンドポイント理論、ポスト合理主義あるいはポストモダンフェミニズムである。これら三つのうち最初の見地は、合理性と平等を信奉するモダニストの伝統の中央に位置しており、前稿の主題であった。本稿では、後者ふたつの見地を取り上げる。それぞれの方法論には明らかな相異があり、時代を追って発展し、明らかに複雑化しているけれども、ここでそうした解釈は意図していない。これら三つのカテゴリーは、教育面での便宜上にすぎない。多くのフェミニスト地理学者は、この三つのうちのひとつのカテゴリーに容易には適合しないだろう。それどころか、多くのフェミニスト地理学者は、自分たちの業績に対する私の分類に不満を漏らすかもしれない。さらに、カテゴリーの境界そのものが浸透できるものであ

＊ ケンブリッジ大学　＊＊ お茶の水女子大学・院

り、変わりやすい存在である。しかしそれにもかかわらず、そうしたカテゴリーは、理論的、方法論的な傾向、整合、不適合を表している。

Ⅱ フェミニストスタンドポイント理論・反合理主義・本質主義

本論文で概説するふたつのフェミニズムのうちのひとつめの見地（反合理主義あるいはフェミニストスタンドポイント理論）と、最初の論文で論じたもの（合理主義あるいは経験主義フェミニズム）との基本的な違いは、ジェンダーの差異を理論化する方法にある。このフェミニズムの知の第二のカテゴリー――スタンドポイント、反合理主義、古い言い方ではラディカルフェミニズム（社会主義フェミニズムとは区別される）と多様に名付けられている―は、ジェンダー差の価値付けの点で、フェミニスト合理主義・経験主義とは異なる。この見地での研究は、権利、義務、公正という合理主義ヒューマニストの概念に基づいて、ジェンダーに起因する差別を不公正とみるよりも、差異を賞揚する。そして、男性的なものすべてを優位に置く伝統を廃止するよりも、むしろ逆転させようと試みる。

例えばDi Stefanoの言葉をあげよう。

> 反合理主義は、合理主義における女性性への中傷を直視し、この中傷を鑑みて女性性を改めて価値づけようと試みる。重要なのは、この価値付けのための用語が、排除され、軽視された「他者」という用語であることにある。合理主義者の文化が自然、身体、偶有性、直感に反発し、ジェンダーに中立であることを装うのに対して、反合理主義は、差異という強固な概念を援用して、与えられた女性性の不合理性を賞賛する。この試みは、それ自身を不実の抵抗とみなし、通常の人の不完全なコピーとしてよりも、女性化された差異の中に女性をうまく組み入れるような社会秩序を構想する。
>
> (Di Stefano, 1990, p. 67)

反合理主義者の見地からみると、経験主義者、合理主義者の立場の研究を特徴付ける平等の観点―つまり求められるべきものは、男性と同じであること―は、男女間の差異を否定するジェンダー化された男性主義の見解として拒絶される。提案されている性的に中立な合理性は、女性性（の文化的構築）と対極にあると定義されているので、容易に女性を同化させることができない。伝統的に女性と結びつけられてきた価値―例えば、競争的でない、他人と張り合った態度をとるよりもいとおしむ、自己を対立的ではなくむしろ関係性で示す―を、ヒューマニスト理論の肉体を持たない個人という観念論的見解の中に組み入れるのは困難である。

フェミニストスタンドポイント理論と呼ばれるものにおいては（Harding and Hintikka, 1983; Harding, 1986; Hartsock, 1983a, 1983b 参照）、知の構築がジェンダー化された性質を持っていることは評価されている。伝統的な社会理論における知の二元構造と、女性性と劣った性質との結びつきは逆転し、「女性」の知は価値が与えられている。さらにHaraway（1991）が指摘するように、この観点から「女性のもつジェンダー固有の異なった女性の見地が、問題探求のための望ましい基盤として推奨される。なぜなら、排除され、搾取された他者としての女性の経験と見方は、男性集団のそれよりも包括的できわめて一貫性に富むと判断されるからである」(p. 74; 強調は本文)。そして彼女が主張するように、「権力者のまぶしいロケット発射台の裏側からの方が、よく物が見えると信じるに足る十分な理由がある」(Haraway, 1991, pp. 190-191)。したがって隷属させられた者の知は、「合理的で」現実から遊離した啓蒙思想の知の対極に置かれる。この伝統に立つ研究は、ヒューマニズム思想における時間・空間の概念に対する異議申し立てとして、興味深いものとなっている。例えばHartsockはAdrienne Rich（1986）を引用して、女性であることは、境界、とくに、身体と客観的世界、自己と他者の間に措定された境界という伝統的な概念を批判することであると指摘する。例えば、月経、分娩、授乳といった女性の経験は、すべて、身体的境界に対する異議申し立てを意味する。女性の自我構築においては、複雑な関係性の網目の中に中心を持つ存在である。それに対して、男性の自我構築においては、分離しており、示差的で他との関係性がない。これらの差異が、空間性、境界、コミュニティといった地理的概念に与える含意は、まだ検討されていない。しかし多くのフェミニストは、これらの研究の中で、一人の女性の経験という本質的概念からは身をかわしている。

反合理主義やフェミニストスタンドポイント理論と政治的・実践的基盤を持つラディカルフェミニズム理

論の間には明らかな関連がある。少なくともイギリスではこの関連性のために、こうした見地が学会や学問の中のフェミニズムにあまり影響を与えていない。この関連性は、例えばエコロジカルフェミニズムと、それに結びついた運動に明瞭に見て取れる。しかしラディカルフェミニズムと社会主義フェミニズムの初期の区別、またここで分類した合理主義／経験主義と反合理主義という研究の区別は、誇張すべきではない。実際、例えばNancy Hartsockやその他の研究はその境界にまたがっている。この展望の第1部で論じたように、フェミニスト地理学のおもなねらいのひとつは、女性の知と経験に価値を与えることであり、彼女たちの声が学会で耳を傾けられるようにすることである。第1部で展望した研究の中で、例えば、女性のための空間デザインに関する論文（Keller, 1993を参照）や女性の恐怖に関する論文（Valentine, 1989, 1990）などは、等しくこの第2の分類の中に位置づけた方が適切かもしれない。あらゆる分類は社会によって形成されるのであり、カテゴリー間の区別は必ずしも文章で表現されるほどには明確ではないのである。

しかしこの第2の論文では、多様な地理的文脈の中で、女性と女性の経験に焦点をあてた研究、ジェンダーシンボリズムと表象の問題に取り組み始めた研究を展望した。とくに重要なのは、広汎な女性の経験の多様性を認める研究を展望することにした点にある。こうした地理学者の中には、意識的に自らをフェミニストスタンドポイント理論に位置づける人はほとんどいないが、彼／彼女たちは女性の知を発見し、その価値を認めるという共通の目的を持ち、また女性間の差異には敏感であるにも関わらず、研究の中心的な分析カテゴリーとしてジェンダーをつねに用いるという点で共通している。Susan Bordo（1990）が、ポストモダニズムの重要な側面として同定した、分析カテゴリーとしてのジェンダーへの懐疑は、こうした研究ではまだはっきりしていない。しかし平等という観点からジェンダーの問題を見ることから、差異という観点から見ることへの変化は明確になっている。

多くの著書や論文が、1980年代に地理学者によって発表された。それは女性の経験と、景観や場所との固有な関係の再発見を目的としており、それゆえ反合理主義／スタンドポイントアプローチとして分類するのが適当だろう。例えばSusan Mackenzie（1989）は、戦後のブライトンにおいて、自らの地理と「目に見える歴史」の形成に関与した女性たちを調査した。他の研究者は、カルチュラルスタディーズや美術史に目を向け、ジェンダーシンボリズムや表象の研究、絵画・詩・陶器・キルトのような女性が製作した作品を検討した。地理学者であるJanice Monkとアメリカ地域研究者であるVera Nortwoodが行なった、アメリカ南西部の景観に対する著作や芸術の中での女性の受け止め方を調査した研究は、そのすぐれた例である（Nortwood and Monk, 1987）。この本は、国外在住の白人女性の経験と、ヒスパニック、メキシコ系アメリカ人、アメリカンインディアンの女性に関して長年にわたる伝統とを比較しているため、とくに重要な本である。この本は、コンテクスト、固有な文化的背景を持つ女性間の差異、そしてアメリカ南西部において「内部者」や「外部者」として女性の占める場所に対して、細かな配慮をしている。したがって、ひとつの観点よりむしろ複数の観点を反映しており、反合理主義とポスト合理主義フェミニズムの間の境界をまたいでいる。しかし、この本は景観に対する女性の経験や反応を明らかにすることに力点が置かれ、そしてジェンダーを中心概念としたままである。同じ著者たちはまた、異なる場所と時間に対する女性の反応の虚構的表象を検討している。例えば彼女たちは、郊外化に対する女性の反応を研究するために、戦間期と戦後期のオーストラリア人作家による文学作品を調べた（Monk and Nortwood, 1990）。オーストラリアの地理学者であるFay GaleとJane Jacobsも、場所の重要性に関する研究に着手している。彼女たちの研究は、文学の中や地表上における女性の景観とアボリジニの神聖な遺跡の意味との両方に関わるものである（Gale, 1989）。英国では、Liz Bondi（1992a）が現代の都市環境のジェンダーシンボリズムに関する問題を扱い（Warner, 1985も参照）、Gillian Rose（1992）はGriselda Pollack（1988）のようなフェミニストの美術批評の研究に依拠しながら、文化地理学者の景観に関する研究がマスキュリニストの見地を具現化する様式の問題に取り組み始めている。

女性間の差異に対してはますます注意深くなっているものの、反合理主義とフェミニストスタンドポイント理論が、確固として「一般化可能な、普遍的な知への追求を、なおフェミニスト経験主義と共有している」(Harding, 1986, p. 27）と主張されてきた。さらに

Harding は、いわゆる「女性」運動の主張にみられるのと同様に、単一のフェミニストスタンドポイントを求めることが、合理的ヒューマニズムの主張のように抑圧的で全体化するものであることを示してきた。合理的ヒューマニズムの見地のようにフェミニストスタンドポイントは、本質的なアイデンティティという概念にとらわれたままであり、この場合は、他者を普遍化している。しかし Harding は、スタンドポイント理論が、一般的かつ普遍的ないかなる主張についても懐疑をはさむポストモダンへとわずかながらも近づいており、移行途中の知の有益な形態であることも指摘する。スタンドポイント理論として私が分類した地理学者の研究は、この移行期を表しているように私には思える。フェミニスト地理学者は明らかに、画一的なカテゴリーとして女性を一般化することから、様々な場所で固有なジェンダー関係を生み出す歴史に規定された過程をより具体的に理解するように変わりつつある。実際、地理学の存在理由の核心が場所間の差異の研究であるとすれば、女性間の差異（例えば、最近の地理学ではライフサイクル段階の差異が強調されている; Katz and Monk, 1993）や場所間のジェンダー関係の構造における差異（Momsen and Townsend, 1987; Momsen and Kinnaird, 1993）に注目しないフェミニスト地理学を想像することは困難である。初期の論文を参照して書かれた最近の多くの論文は、それとよく似たテーマや問題を取り上げているが、それらは女性を分断する社会的次元についてより強く意識している（例えば McLafferty and Preston, 1991 参照）。ただし近年の議論で Rickie Sanders(1990)は、ジェンダー研究から人種と民族を排除することの問題が、地理学でなお十分に議論されていないことを指摘している。しかしここで展望した研究は、ジェンダーの特徴を一貫した分析カテゴリーとして、相変わらず当然のものとみなしている。女性間の差異には気を配っているけれども、「女性」というカテゴリーをポストモダン的に脱構築することには、（まだ）はっきりとは容認も否認もしていない。こうした方向に進むよりも、むしろコンテクスト重視の研究としてフェミニスト地理学研究を判断するのが適当かもしれない。この研究では、女性間の差異、そしてジェンダー化された社会関係やジェンダーシンボリズムの固有の場所を基盤とした形成は認識しているけれども、その対象である女性に中心的な焦点をあてることには、積極的に異議を唱えないのである。

しかし、理論的・政治的な女性間の差異の容認は、1980 年代のフェミニズム研究においてもっとも重要な展開のひとつであった。それは、フェミニズム研究の理論的基盤に対する異議申し立てだけでなく、社会構築に関与している（おもに白人）フェミニストの著者の権威に対する政治的異議申し立てであり、誰がそうした学問に含まれ、あるいは排除されているのかだけではなく、誰が誰のために主張するのかについて疑問を表明している。したがって、この 10 年間は、自分たちも従属させられているマイノリティの一部に含まれるということを自明のことと考えていた（白人ブルジョワの）フェミニストにとって、困難な時期であった。アカデミズムの中で研究に従事し、アカデミックな知の生産と普及の伝統的構造に自らは反対する立場にいると自分自身を自己規定した（おもに白人）女性にとって、自らが問題の一部とみなされていることに気づいたことは衝撃であった。

しかしこの 10 年の間に、例えば女性運動の政治的論点が打ち捨てられたように、家父長制についての理論的な討議の中で具現化した民族中心主義的な概念に対して、有色人女性による本格的な異議申し立てがなされた。フェミニスト地理学者は、女性間の差異だけでなく人種や民族、性的指向、年齢、地域的・国家的アイデンティティ（Bondi, 1992b; McDowell, 1991; Marson, 1992）といったさまざまな差異が提起する困難な問題を認識し、それから異議申し立てを受けた。地理学者は、世界の様々な地域での女性の生活に関する豊富な知の体系を構築したが、理論的に洗練されたこれら研究には、必ずしも十分な実証研究がともなっていなかった。ジェンダーの地域的な形成における多様性や、場所、階級、「人種」、民族ごとに女性性と男性性の特徴に差異をもたらす様式は、フェミニスト地理学者によっては（より一般的にいえば地理学者によって; Smith, 1990 の批判参照）理論化が行なわれておらず、あるいは付随的な問題としてしか見なされない傾向がある（Spelman, 1988）。したがって、労働者階級の女性は中流階級の女性よりも抑圧され、有色人女性は白人女性よりも抑圧されているという主張が行なわれた。他の社会に対して西欧の概念（そして西欧の女性運動の論点）がそのまま移し変えられる傾向もあった。しかし現代の政治運動、とくに有色人女性から

の異議申し立ては、他の分野の女性研究者同様、フェミニスト地理学者が女性間の利害の多様性の持つ意味を認めなければならないことを意味している。フェミニズム研究の中心的な分析カテゴリーとして、また政治組織の焦点として、両性のジェンダーの概念を維持しながら差異を理論化する方法は、今やフェミニズム研究の中心的論点である。

Ⅲ 差異の考察

本論文でのこの章は、かなり変わった見方をとる。つまり、フェミニスト地理学者によって行なわれた研究を展望するのではなく、むしろ将来の方向を描こうと試みる。この章では、地理学以外のフェミニズム研究者による議論に焦点をあてる。ただしそのねらいは、地理学分野に対する意味を評価すること、またこうした議論が地理学的概念にきわめて類似した概念で満たされるために、その議論に対して地理学者がすると思われる重要な貢献を評価することにある。以下で紹介する論文では、場所、立地、位置、縁辺、境界といった概念が重要な用語となる。しかし現在、地理学者と他の学問分野のフェミニズム研究者によるこれらの用語の利用法の比較は、多くの地理学者が学会発表においてその問題を提起しているにも関わらず、ほとんど検討されないままである（Chalita, 1992; Katz and Smith, 1992）。

最近のフェミニスト分析—Di Stefano がポスト合理主義者と分類し、Harding がポストモダンフェミニズムと分類した研究—では、分析カテゴリーとしてまた共通の関心の基盤として、ジェンダーそのものの特徴が激しい議論の的となっている。集団としての女性（あるいは男性）がジェンダーによって一体性を与えられているという主張は、前節で述べたような批判によって崩壊してきた。

つぎのような Di Stefano（1990）の言葉を考えることは有益である。

> 最近、ジェンダーという概念そのものが、新しい知的、政治的集団から批判的評価を受けるようになっている。彼／彼女らは、ジェンダーおよびその核となる仮定や用語が、かつてのヒューマニズムが犯したと同じ全体化という欠点をかかえていることを非難している。この見方に立つなら、ジェンダーは悲惨で抑圧的な虚構しか意味していない。「女性」という虚構は、基盤としてのジェンダー概念によってはうまく対処できない女性間の多様な差異を非道に踏みにじる。いく人かの著者にとって、ジェンダーは、もはや女性の生活において、おそらく貧困、階級、民族、人種、セックスアイデンティティ、年齢ほどには、基本的ではないと考える人もいる。女性は、白人、ブルジョワ、イングランド人、ヘテロの男女といった集団ほどには、男性と明確に区別されるとは感じていないのである。ここで主張したいのは、基盤としてのジェンダー概念が批判的な異議申し立てというより、むしろ恣意的な差異の神話を具体化し、一方でそれは、別の重要で従属させられている差異を無視しているという点にある。
>
> (Di Stefano, 1990, p. 65)

したがって、フェミニスト経験主義を特徴づける合理主義のパラダイムだけではなく、主体としての「女性」という反合理主義の概念をも拒否することが必要であるように思える。この拒否のひとつの帰結は、主体としての女性（または男性）を、中心を持たない部分的で断片化したアイデンティティという新しい概念、つまり「現れては消えていく、絶えず変わっている基盤」（Di Stefano, 1990, p. 65）によって置き換えることである。フェミニストの研究に対してこれが与える意味は、きわめて大きい。ひとつの帰結は、存在、自然、理性の力、発展、科学、言語、精神／身体の分離、合理的な主体／自己、に関するあらゆる普遍的ないし普遍化する主張に対する懐疑である。フェミニストの主張は、この懐疑から逃れられない。その含意は、理論的に特権を与えられることがないよう、多数の差異に再び注目すべきことであり、そのうちのどの差異も特別扱いをしない。この結論は、フェミニズムの弔鐘を意味するように感じる人もいるかもしれないが、位置づけられた部分的な知という魅力的で刺激的な概念を切り開くと感じる人もいる。

Ⅳ 地理学者・フェミニズム・モダニティ・ポストモダニティ

ポストモダニティの一部の主張に対してはっきりと共感を示し、その他の主張に対しては合理主義の伝統を相変わらずよりどころとしている地理学において、フェミニスト地理学者たちはこの異議申し立てに対してどのように反応してきたのだろうか（Dear, 1988; Harvey, 1989; Soja, 1989）。おもにフェミニスト地理学

者の最初の反応は、ポストモダニティの主張への懐疑であった。多くの地理学者は、女性間の差異に関する主張は認めるが、ジェンダーが重要である、すなわちある差異が他の差異よりも重要である、という主張を放棄しようとはしなかった。したがって多くの著者は（Bondi and Domosh, 1992; McDowell, 1992; Massey, 1991）、Nancy Hartsock に共感を抱いた。なぜなら彼女は、服従させられた人々が自分自身の権利を主張したちょうどその時に、主体の主張と自由をもたらす「真実」という概念が消滅したことに疑問を表明したからである。多くのフェミニストにとって、ポストモダンの「主体の死」は、知に対する自分たちの中心的な主張が置き換えられてしまうことに対して特権を持つ西欧白人男性の不安を表しているかのように思えた。それは Di Stefano（1990）が述べているように、「ポストモダニズムは、それ自身の啓蒙思想を持っており、その伝統を批判的検討にさらす用意ができており、また進んでそうする信奉者の主張や要求を表している」（p. 75）のかもしれない。事実こうした反応は、フェミニスト地理学者である Susan Christopherson によって説得的に表明されている。地理学者の中には、「人文地理学を再編成すること」を目的に、ポストモダン理論へ向かった人もいるが（Dear. 1988）、Christopherson（1989）は、まさしく「構造主義者」のように、彼らが「プロジェクトの外に」フェミニストを置き去りにしつつあることを気づかせた。

しかし、様々な地域のジェンダー関係の地理学に関する研究を任せられたフェミニスト地理学者の反応は、真実に対するモダニストの主張に後戻りするのではなく、多様な女性のアイデンティティの構築における場所の重要性についての議論の幕開けであった（Chalita, 1992; Massey, 1991a）。この仕事は依然として未熟な段階にあり、その中には、理論的な旗じるしを鮮明に掲げる人は少ない。けれども、ポストモダンの脱構築という課題に共感を示す地理学者は、たとえ共通の差異がないとしても、個別的な差異を生み出すひとつの差異としてのジェンダーを放棄しようとはしない。フェミニスト地理学における近年の目的は、Harding と Haraway が明確にした「部分的」あるいは「位置づけられた知」を目指す動きである。ひとつだけ例を挙げると、地理学アカデミズムにおける白人英国人女性の地位は、他の人種や階級出身の女性の地位とは同じではなく、これが知の構築における相異を生み出すことこれが知の構築における相異を生み出すことを認識している知である。Haraway（1991）が述べるように、「抑圧の各状況は個別の分析を必要としており、それは人種、性、階級による分断は認めないが、差異は主張する」（p. 146）。さらにそうした分析は、女性が不安定で従属した地位にあり、空間と時間の中で女性特有な形で構築された体系、そしてそれらをの変化を受け入れる様式を考慮に入れなくてはならない。

位置づけられた知

しかし、こうした非難の認識論的、政治的含意はかなり大きい。位置づけられ中心のない知は何を意味するのだろうか。どのようにして、分断を認めずに相違を主張するのか。このことは、空間と場所にとりわけ関心を示す地理学にとって何を意味するのか。差異のある女性の中で、場所の重要性をどのように理論化すべきなのだろうか。本当に、ジェンダー化されたアイデンティティは場所に固有のものなのだろうか。いかにして、（多くの）女性の中心性を持った関係的な経験と、グローバル化、国際的資本主義関係の影響を調査するのだろうか。こうした疑問が、フェミニスト科学理論、文学理論、そして「他の」文化の女性による著述に手がかりを探している地理学者によって提起され始めている。

もっとも有効な手がかりは、科学問題に関するSandra Harding の研究（1986）と、Harding の位置づけられた知の概念の議論を発展させた Donna Haraway（1991）にみられる。Harding の課題は、フェミニズムの見方の変わることのない部分性を理論化することであり、またこれを容認することによって、共有されたアイデンティティの仮定に基づく政治ではなく、対立したアイデンティティの連帯に基づく政治を築くことである。彼女が求めることは、フェミニストが彼女たちのケーキを手にし、それを食べることができるようにすることである。すなわち、彼女が科学的研究の継承者と名付けた概念と、ポストモダニスト的差異の説明とを持ち続けることである。Harding の研究について Haraway は、以下のように言い換えた。

> 「われわれの」問題は、すべての知の主張と知の主体に関するラディカルな歴史的偶発性の説明、意味を生み出す自分たちの「記号論的技術」を認識するための批判的実践、そして「現実」世界の誠実な説明に対する意味の

ある現実的な遂行を、どのように同時に説明するかである。すなわち限定された自由、適度な物質的豊かさ、苦しみにおけるつつましい意味と限られた幸せなどの地球規模での研究課題と部分的に共有し調和した問題である。Harding は、この必須の多様な願望を、科学的研究の継承者、縮約できない差異へのポストモダン的固執、ローカルな知の根本的多様性に対する要求と呼んでいる。そうした願望のすべての要素は、逆説的かつ危険であり、それらの結合は矛盾しているが必然である。

(Haraway, 1991, p. 187)

V フェミニスト幾何学

そうした矛盾した結合に影響を与えると思われるローカルな知を構築する際に、Haraway は階層的支配とは異なった方法で、差異の関係を検討する「差異の幾何学」を発展させることが必要であると主張する。Haraway はベトナムの映画製作者であり理論家である Trinh T. Min-ha (1986-87) の仕事と彼女の「専有されない他者」の概念を引用している。これは、アイデンティティ理論の中で与えられる「自己」か「他者」か、フェミニストかどうか、という二元的アイデンティティの受け入れを拒否する人々を位置づけることに言及した概念である。Haraway は「こうした新しい幾何学が求めるであろう、確固とした知的、文化的で政治的な研究」(1991, p. 3) を強調し、この幾何学がとらえるかもしれない特徴を描き始めている。この幾何学は「二元論や弁証法、いかなる種類の自然／文化モデルからも抜け出るにちがいない」(p. 3) ので、それは「問われている対立項の固定された両端の間の緊張と共鳴の地図」(p. 195) として見るのが妥当である。ローカルな知を具体化した地図というこの考え方が概述されている Haraway から少し長めの引用をひいて、やや詳細に検討することは価値があるだろう。なぜならその引用は、地理学におけるグローバル／ローカルという議論と興味深い対応を示しており、またフェミニスト地理学者が位置づけられた知の理論と戦略の構築に貢献することを可能にするからである。

位置づけられた知に関する論文で Haraway は、具現化されたローカルな知が啓蒙科学の持つ実体性のない合理的客観性とは異なる客観性、すなわち明確で、限られた意味での客観性とみなされるべきであると主張している。この知は部分的であるがゆえにまさに客観的である。それは、どこにもない場所 nowhere からの観点ではなく、むしろどこかある場所 somewhere からの観点なのであり、ポストモダニズムの相対主義ではなく、人々の生活に根ざした主張である。全体の引用は以下の通りである。

問題となっている対立項の固定した両端の間の緊張と共鳴の地図は、影響力のある目的と、具体化されそれゆえ説明可能な客観性の有効な戦略をうまく表している。例えばローカルな知は、知と権力の網目の中で、不平等な――物質的、記号論的――変換と交換を強いる生産構造との緊張状態を持たねばならない。網目は、時間、空間、意識という世界史の諸次元への深い縦糸と粘りのある横糸を持った組織的な権力、すなわち中心に構築された地球規模のシステムの権力を持ちうる。フェミニズムの説明能力には、二元論ではなく共鳴に調和した知を必要としている。ジェンダーは、構造化され構造化する差異の領域である。そこでは極端な地域化、完全な個人、個別化された身体の音色が、地球規模での強い緊張とともに同じ領域で鳴り響いている。それゆえ、フェミニズムの具現化は、女性であるかそうでないかという体現された身体の中に固定された位置にあるのではなく、各場所での結節点、方位の屈曲、意味の物質的・記号論的領域における差異に対する責任にある。

(Haraway, 1991, p.195)

グローバルスケールからもっとも個人的なスケールに至る社会的諸力によって多様に構築された一連の領域の中の結節点というこうした具現化の概念は、私には、Doreen Massey などの地理学者が求めている場所の概念に近似するように見える。実際、Massey (1991b) はこれとほぼ同じ用語を用いて、地理学を長く支配してきた空間的に明確な固定化された場所 local の概念ではなく、境界がなく変わりやすい関係のネットワークの中に弁別的に位置する結節点として場所を規定している。もしネットワークによる場所の概念を用いるなら、Harvey の研究に充満しているローカル／グローバルという区別を免れることになり、それゆえ「存在」あるいはアイデンティティの場所として、また社会関係が何らかの形でより「本物の」場所としての場所／ロカリティという保守的な考えから逃れることができるように思える。同様に Iris Young (1990) は、フェミニズムの政治思想を特徴づける空想化され空間的に固定化されたコミュニティ概念を批判した。彼女は、この概念が「時間と空間による隔たりの拒否を意味し」、個人の対面的関係がより本物であると無条件に考えている。これは女性の性質をより開放的で寛大で

あるとする見方と対応している。なぜなら女性は、日常生活の中で小スケールの一対一の社会的つきあいに関与している度合いが大きいからであり、このことは、一部の反合理主義にも共通してみられる。

VI 場所のフェミニズム／ポスト合理主義概念に向けて

多くの地理学者は、現代フェミニズムの著作において空間に言及することが目立つ点に注目した（Bondi, 1992b; Kaz and Smith, 1992）。とくに、社会の慣習的規範の「外部」にいると感じている女性、例えば移民女性、有色人女性、レズビアンたちに関する研究は、場所を見いだす葛藤の中で彼女たちが境界線を超えることに関する議論において、空間的なイメージで満たされていると指摘している（Mohanty, 1991; Spivak, 1988; Probyn, 1990）。しかし、このメタファーの活用がどの程度地理学者による研究と関連しているか、あるいは、本当に社会的位置よりも空間的位置に言及しているのかという点はまだはっきりしない。しかし、空間的に固定された地理的位置という従来の定義に対して、異議を申し立て再構成しようと試みる際に、この研究から引き出すことのできる重要な教訓がある。最後に、フェミニズム研究者が、これらの用語に関して主流となっている階層的で固定された地理的定義に異議を唱え、場所とコミュニティの概念をどのように研究の中で定義し直しているのかを概観する。

最初の例は、フェミニスト政策に対してポストコロニアリズムが持つ意味に関する「第三世界の」女性の研究からの引用である（Mohanty et al., 1991）。とくに、Chandra Talpade Mohanty のようなポストコロニアリズム・フェミニストの研究は、地理学者に対して慎重な研究を再び促す。Ann Russo and Lordes Toores とともに編集した論文集の序章で、最近 Mohanty は、Benedict Anderson（1983）の「想像の共同体」の概念と Dorothy Smith の支配関係の議論に依拠しつつ、「抗争する地図」としてコミュニティを再定義した（Smith, 1987）。Mohanty の研究と Anderson の研究の中での場所あるいは共同体は、分類概念でも領域概念でもなく、関係性の用語として定義される。すなわち場所は、連帯ならびに権力側との反対闘争から構築される。これは、刺激的で有益な定義である。なぜなら、一緒の居住、生態、文化に基づいた空間的に境界を持つ場所や共同体という概念を捨てさせ、研究対象を規定するための政治的基礎を与えるからである。

この概念は、多様な空間スケールで機能しており、われわれがローカルなものとインターナショナルなものとを結びつけることを可能にする。この結びつきは、史的地理的唯物論やロカリティアプローチを支持する地理学者、また Harding や Haraway のようなフェミニスト地理学者のいずれもが探し求めているものである。例えばそれは、われわれが国際資本主義とジェンダー関係の結びつきを再概念化することを可能にする。コロニアリズム、資本主義、人種、ジェンダーに関する現代史は、地理学者が「本当の」概念図を書き直す必要があることを指し示している。例えば、第一世界／第三世界という区分を世界の領域区分の上に地図化するわれわれの伝統的な行為は、帝国主義的仮定を具体的に表しているだけでなく、世界の社会経済的地域像の描写として次第に不適当になりつつあることも示している。経済と労働力のグローバル化は、旧植民地やその他の地域から「第一」世界への大規模な国際移民に影響を与え、第一世界の縁辺に移民を追いやる（Anzaldua, 1987）。しかし第一世界の「中心」でも、西欧やアメリカのインナーシティに「多民族」の人口が再び集積している。グローバル化の結果、女性の地位とジェンダー関係は、出身地である「第三」世界においても、移民先の西側諸国のこれら都市においても、ますます多くの女性がプロレタリア化している。

このことは、明瞭な地理学的焦点となる新たな一連の疑問をフェミニストに提起した。すなわち、「第三世界とは誰のことなのか、そして何のことなのか？ 第三世界はどこにあるのか？ 空間的に連続しているのか不連続なのか？ 第三世界の女性たちは何らかの基盤を作り上げているのか？ その基盤は何なのか？ ジェンダー、民族、国家の問題はどのように関わっているのか？」といった疑問である。つまり、Mohanty が主張するように、ラテンアメリカ、カリブ、サブサハラアフリカ、南アジアと東南アジア、中国、南アフリカ、オセアニアのいずれかの国民国家に地理的に位置する第三世界の女性たちも、あるいはアメリカ、ヨーロッパ、オーストラリアにおける黒人、ラテン人、アジア人、原住民の女性たちも、第三世界の対抗的な闘争に基づく「想像の共同体」なのである。「想像とい

うのは、『真実』ではないという理由ではなく、明確な境界をまたぐ連帯の可能性を意味するからである」。また「『共同体』というのは、階層が内在しているにもかかわらず、Andersonが国家概念に言及する際に『歴史的仲間意識』と名付けたものに、根本的に強くかかわっているからである」（Mohanty, 1991, p. 4）。私には、彼女の議論が Massey の場所発展の感覚という概念をさらに発展させたもののように思える。

Mohanty は、「第三」世界のフェミニスト闘争という本質主義者の概念よりも先に進むのに、こうした考え方が役に立つと考え、生物学的・位置的理由よりも政治的理由を連帯に対して示唆している。なぜならそれによって、共同体という小スケールの概念を不連続な境界と向き合わせることができるという点で、地理学者にとって利益をもたらすからである。それらはある意味で、入れ物としての場所の本質主義概念から進んでいる。彼女が「そのような想像の共同体は、歴史的また地理学的に具体的だが、それらの境界は必然的に変わりやすい」（p. 5）と指摘しているように、Mohanty の議論は、空間的対象を定義するために苦闘している地理学者にとってきわめて刺激的だと私は考えている。

Ⅶ 場所における主体

フェミニズム研究は、位置がジェンダー化されたアイデンティティの構築に果たす、場所というものに関心を抱いている点でも、フェミニスト地理学と広く見解を同じくしている。Haraway は「女性」という複雑で矛盾した多様な主体を強調した。これは「同質でない社会空間の中に批判的に位置づけること」（Haraway, 1991, p. 5）の結果である。位置と距離は、この位置づけにおいて何らかの役割を果たしている。そしてフェミニストによる近年の興味深い研究の中には、空間と場所の社会的構築と主体を生み出す際に果たすその役割に関して、疑問を提起している。例えば、コロニアリズムに関心のあるフェミニストは、男性から女性を区別し異なる人種と階級の女性を相互に区別する人種的性的境界を構築するために、植民地国家が実質的および象徴的な距離をどのように用いるかを示してきた。もちろん、人種による物理的、象徴的分離は、圧制的統治の著しい特徴である。アパルトヘイトは地理的分離を極限まで押し進めたものである。そうした例は、時代的にも地域的にも多数みられる。19 世紀アメリカの南部諸州における貞淑で高潔な白人女性という概念の形成は、文明よりも自然の近くに位置し、貞操がなくふしだらな黒人奴隷女性という対立概念に依拠していた。ビクトリア期ブルジョワの高潔で私的という女らしさについての同様の概念は、植民地時代、インド女性の間の階級区分を形成するのに重要であった（Sangari and Vaid, 1989）。現代イギリスの例を挙げるなら、ウェストヨークシャーのブラッドフォードにおける「人種化した」男らしさの構築が、イギリスの白人女性の労働力をアジア人男性に置き換えるメカニズムであることを Jackson（1991）は示した。

この論文で Jackson は、女らしさだけでなく男らしさに関しても、歴史的地理的に固有な形態の形成に関する研究課題を概述した。また一連の地理学者は、男性性の主導的な概念に対する異議申し立てのためにその位置づけを行ない始めている（Bell,1992）。同様に Elizabeth Wilson（1991）は最近、都市空間構造と女性性の社会的構築との関係に関する従来の議論を批判している。『スフィンクスと都市 *The sphinx and the city*』という本の中で彼女は、19 世紀以降の様々な時期における様々な都市において、都市空間とジェンダーの社会構築との関係を再概念化するのに着手した（19 世紀後半の都市におけるジェンダー関係についての Woolf (1985)の議論に対する Wilson(1992)の反応も参照）。

Ⅷ 結語：ローカルな知／ジェンダー化された知

この調査展望が系譜的なのはやむを得ないが、様々なフェミニズムを順番に紹介したのは、ひとつのフェミニズム論がより優れた見解によって継承されていることを示そうとしたからではない。現在の状況は多様な立場の併存であり、力点の置き所には微妙な差異があり、互いの視点の交錯もみられる。三つのタイプのフェミニズムを区別する違いは、それらが持つ共通の遺産を覆い隠している。例えばマルクス主義フェミニズムは、スタンドポイント理論の見解に影響を及ぼしており、Hartsock の仕事はその典型例である。またフェミニスト経験主義は、マルクス主義フェミニズムと同様に伝統的な客観性の概念に固執しており、極端な社会構築主義やポストモダニズムの主張に対しては慎

重である。フェミニストがより優れた世界認識を求め続けるならば、伝統的な定義による「科学者」仲間の中にあって、それと同時に具現化された知に対して主張するのが自分たちにとって心地よいと感じるだろう（McDowell, 1992）。それゆえ、指針となる系譜とはならないが、Harding と Haraway が提案する矛盾したフェミニスト客観主義、すなわち、ある差異は、他の差異よりも顕著である、いう主張は、フェミニズムと調和する課題であると私は考えている。これは、その文化的構築を認識する一方で、実際に存在する物質世界を受け入れることを主張し、差異の理論的分析を追求し、（象徴体系、一連の社会関係、個人のアイデンティティとしての）ジェンダー、セクシュアリティ、世帯、家族構造の相互関係の理解と、場所の中あるいは場所間の家庭と職場との関係に関する政治経済学を作り上げるフェミニズムである。それは、女性間の差異の理論的理解に基づくフェミニズムであり、初期のころにわれわれが関心を示した家父長制の起源を調べる通史的で階級横断的な研究（Foord and Gregson, 1986; McDowell, 1986）と、女性間の権力関係の構造を否定する文化的な女性本質主義の概念のいずれをも拒否する。それは、物質世界の存在、すなわち様々な社会的形態を持ちながら生活し、その関心が収斂したり分散したりする闘争に携わっている女性の存在を認めるフェミニズムである。

スタイルを損なうか衣服を作り直すか？

最後に、フェミニストからのこの種の議論を、地理学がいかに受け入れるかについて問題が残された。われわれは「プロジェクトの外部」で研究を続けるのだろうか。この展望の第1部の導入で私は、Virginia Woolf の言葉を引用して、フェミニズムとフェミニスト地理学がいかに地理学という衣服を引き裂き、異なる形に作り直すかについて、しめくくろうとした。しかし残念なことに、これは誇張と思われる。10年以上におよぶ刺激的で革新的な研究の蓄積があるにもかかわらず、いまだに地理学は、フェミニズム研究からほとんど影響を受けていない。おそらくわれわれの多く（地理学内部のフェミニストの数はまだ少ないが）は、われわれの研究やその能力が学問の内外に変化をもたらすような直接の有益性にさらに敏感になっているけれども、この 10 年間はフェミニスト地理学の内部においても大きな変化を遂げた時期だった。

力点の変化は、三つの「C」で表現される。すなわち、制約 constraint、コンテクスト context、構成 constitution である。本稿において示したように、今や地理学内外のフェミニズム研究は、人類学者 Di Leonardo の表現を借りれば、「より複雑な世界」（Di Leonardo, 1991, p. 27）の中にある。実際8年前に、地理学内でのフェミニズム研究グループの初期メンバーの一人である Susan Mackenzie（1984）が地理学とジェンダー関係における研究の理論的な未熟さを嘆いたにもかかわらず、その6年後に Gerry Pratt（1990）は、フェミニスト（都市）地理学の理論的洗練を評価しただけでなく、空間と場所という地理学的概念を考慮することで、広くフェミニズム理論全体が豊かなものになると述べている。

しかし依然として対抗的位置に基づいて「位置づけられた知」の構築を求める主張は、地理学内部からは大きく聞こえてこない。近年の人文地理学における文化への指向、さらにはポストモダンへの指向と、場所、特殊性、表象の問題や位置づけ、具現化された知、テクスト分析の問題への（再度の）注目にもかかわらず、多くの地理学者の関心を呼んでいるのはフェミニズムの位置づけられた知よりもむしろ、どこにもない場所 nowhere からの中心を持たない相対主義の見方である。しかし別の人が指摘しているように、この点にこそ大きな危険が潜んでいる。フェミニストからの異議申し立ては、学問の内外において権力構造を握っているマスキュリニストに向けられているだけでなく、われわれの認識体系の核心まで及んでいる。Susan Burdo やその他の多くのフェミニストが自己を啓発した後の犠牲を認識しているように、主人公が自ら舞台の中心を譲るのに消極的なことは、しごく当然である。もし彼／彼女たちが中心を占めないなら、誰も中心を占めないだろう。しかしどこにもない場所 nowhere からのこの見解（そしてどこにでもある場所 everywhere からの啓蒙的な見解）に対して、フェミニスト地理学者は、すべてがどこかある場所 somewhere からの見解であることを主張する。では、何がより地理学的な見解でありうるのだろうか。本稿で指摘しようとしたように、地理学と地理学者は最近のフェミニズム研究に多大な貢献をするだけでなく、そこから多くのものを得ている。フェミニズム研究は、地理学に対して破壊的な異

議申し立てを提示するかもしれないが、フェミニズム研究が提供する豊かさの可能性と知的な問題提起は、疑問の余地がないだろう。

付記

本稿と前稿の論文は、1991 年 4 月にロサンゼルスでいたましくも殺害された、フェミニストであり地理学者であり弁護士でありまた友人でもあった Penny Nanopoulos を追悼して捧げる。

謝辞

この論文を論評して下さったレフェリーに感謝いたします。また、不断の寛容さで初稿を読みコメントして下さった Liz Bondi と Peter Jackson に謝意を表します。

文献

Anzaldua, G. (1987): *Borderlands/La Frontera*. San Fransisco: Spinsters/ Aunt Lute.

Anderson, B. (1983): *Imagined communities: reflections on the origin and spread of nationalism*. London: Verso Books. アンダーソン, B.著, 白石さや・白石　隆訳（1997）：『増補 想像の共同体ーナショナリズムの起原と流行』NTT 出版株式会社

Bell, D. (1992): *Sexuality and space network bulletin November*. (Available from The Editor, Department of Geography, University of Birmingham, P.O.Box 363, Birmingham B15 2TT.)

Bondi, L. (1992a): Gender symbols and urban landscapes. *Progress in Human Geography*, 16, 157-70.

Bondi, L. (1992b): Gender and dichotomy. *Progress in Human Geography*, 16, 98-104.

Bondi, L. and Domosh, M. (1992): Other figures in other places: on feminism, postmodernism and geography. *Environment and Plannning D: Society and Space*, 10, 199-213.

Bordo, S. (1990): Feminism, postmodernism and gender-scepticism. In Nicholson, L., editor, *Feminism/postmodernism*. London: Routledge, 133-56.

Chalita, P. O. (1992): *Views from across the hall*. Paper given at the annual conference of the Association of American Geographers at San Diego, April. (Paper available from the author at the University of Washington, USA.)

Christopherson, S. (1989): On being outside 'the project'. *Antipode*, 21, 83-89.

Dear, M. (1988): The postmodern challenge: reconstructing human geography. *Transactions, Institute of British Geographers NS*, 13, 262-74.

Di Leonardo, M. (1991): *Gender at the crossroads of knowledge: feminist anthoropology in the postmodern era*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press.

Di Stefano, C. (1990): Dilemmas of difference: feminism, modernity and postmodernism. In Nicholson, L., editor, *Feminism / postmodernism*, London: Routledge, 63-82.

Foord, J. and Gregson, N. 1986: Patriarchy: toward a Reconceptualisation. *Antipode*, 18, 186-211.

Gale, F. (1989): Seeing women in the landscape: alternative views of the world around us. In Goodnow, J. and Pateman, C., editors, *Women: social science and public policy*. Sydney: Allen and Unwin, 56-66.

Gregson, N. (1992): Beyond boundaries: the shifting sands of social geography. *Progress in Human Geography*, 16, 387-92.

Haraway, D., editor(1991): Simians, Cyborgs and women: the reinvention of nature. London: Free Association Books.

Harding, S. (1986): *The science question in feminism*. Itaca: Cornell University Press.

Harding, S. and Hintikka, M., editor(1983): *Discovering reality: feminist perspectives on epistemology, metaphysics, methodology and the philosophy of science*. Dordrecht: Reidel.

Hartsock, N. (1983a): The feminist standpoint: developing the ground for a specifically feminist historical materialism. In Harding, S. and Hintikka, M., editors, *Discovering reality: feminist perspectives on epistemology, metaphysics, methodology and the philosophy of science*. Dordrecht: Reidel.

Hartsock, N. (1983b): *Money, sex and power*. New York: Longman.

Hartsock, N. (1987): Rethinking modernism: minority versus majority theories. *Cultural Critique*, 7, 187-206.

Harvey, D. (1989): *The condition of postmodernity*. Oxford: Basil Blackwell.

Jackson, P. (1991): The cultural politics of masculinity: towards a social geography. *Transactions, Institute of British Geographers NS*, 16, 199-213.

Katz, C. and Monk, J. (1993): *Full circles: geographies of women over the life-course*. London: Routledge.

Katz, C. and Smith, N. 1992: *Spatial metaphors*. Paper given at the annual conference of the Institute of British Geographers, January.

Keller, S., editor. (1983): *Building for women*. Massachusetts: Lexington Books.

Mackenzie, S. (1984): Editorial introduction to a special issue on women and environment. *Antipode*, 6, 3-10.

Mackenzie, S. (1989): *Visible histories*. Montreal: McGill-Queens University Press.

McDowell, L. (1986): Beyond patriarchy: a class-based explanation

of women's oppression. *Antipode*, 18, 311-21.

McDowell, L. (1991): The baby and the bathwater: difference and diversity in feminist geography. *Geoforum*, 22, 123-33.

McDowell, L. (1992): Multiple voices: on being inside and outside the project. *Antipode*, 24, 56-72.

McLafferty, S. and Preston, V. (1991): Gender, race and commuting among service sector workers. *The Professional Geographer*, 43, 1-15.

Marston, S. (1992): Who are 'the people'? Gender, citizenship and the making of the American nation. *Environment and Plannning D: Society and Space*, 10, 449-58.

Massey, D. (1990): *Time space compression and a progressive sense of place*. Paper given at The Tate, June. (A summary version appeared in Marxism Today, A global sense of place, June, 1991, 24-29.)

Massey, D. (1991a): *Space, place and gender*. Paper given at the London School of Economics, November 1991, and at the annual conference of the Institute of British Geographers, January 1992. (Available from the author at The Open University, Milton Keynes.)

Massey, D. (1991b): Flexible sexism. *Environment and Plannning D: Society and Space*, 9, 31-57.

Minh-Ha, T. T., editor. (1986-87): She, the inappropriate/d other. *Discourse: Journal for Theoretical Studies in Media and Culture*, 8.

Mohanty, C.T. (1991): Cartographies of struggle: third world women and the politics of feminism. In Mohanty, C. T., Russo, A. and Torres, L., editors. *Third world women and the politics of feminism*. Bloomington, Indiana: Indiana University Press, 1-47.

Mohanty, C. T., Russo, A. and Torres, L., editors. (1991): *Third world women and the politics of feminism*. Bloomington, Indiana: Indiana University Press.

Momsen, J. and Kinnaird, V. (1993): *Different places, different voices*. London: Routledge.

Momsen, J. and Townsend, J., editors. (1987): *Geography of gender in the third world*. London: Hutchinson Educational.

Monk, J. and Norwood, V. 1990: (Re)membering the Australian City: urban landscapes in women's fiction. In Zonn, L., editor. *Place images in media: portrayal, experience and meaning*. Sydney: Rowan and Littlefield, 105-19.

Norwood, V. and Monk, J., editors. (1987): *The desert is no lady*. New Haven: Yale University Press.

Penrose, J., Bondi, L., McDowell, L., Kofman, E., Rose, G. and Whatmore, S. (1992): Feminists and feminism in the academy. *Antipode*, 24, 218-37.

Pollock, G. (1988): *Vision and difference: femininity, feminism and the histories of art*. London: Routledge.

Pratt, G. (1990): Feminist analyses of the restructing of urban life. *Urban Geography*, 11, 594-605

Probyn, E. (1990): Travels in the postmodern: making sense of the local. In Nicholson, L., editor. *Feminism/postmodernism*. London: Routledge, 176-89.

Rich, A. (1986): Notes towards a politics of location. In Rich, A. *Blood, bread and poetry: selected prose 1979-1985*. New York: W. W. Norton and Co, 210-31.

Rose, G. (1992): Feminist voices and geographical knowledge. *Antipode*, 24,230-33.

Sanders, R. (1990): Integrating race and ethnicity into geographic gender studies. *The Professional Geographer*, 42, 228-31.

Sangari, K. and Vaid, S., editors. (1989): *Recasting women: essays in colonial history*. New Delhi: Kali Press.

Smith, D. (1987): *The everyday world as problematic: a feminist sociology*. Boston: Northeastern University Press.

Smith, S. J. 1990: Social Geography: patriarchy, racism, nationalism. *Progress in Human Geography*, 14, 261-71.

Soja, E. 1989: *Postmodern Geographies*. London: Verso.

Spelman, E. 1988: *Inessential woman: problems of exclusion in feminist thought*. Boston: Beacon Press.

Valentine, G. (1989): The geography of women's fear. *Area*, 21, 385-90.

Valentine, G. (1990): Women's fear and the design of public space. *Built Environment*, 16, 288-303.

Warner, M. (1985): *Monuments and maidens*. London: Weidenfeld and Nicholson.

Wilson, E. (1991): *The sphinx and the city*. London: Virago.

Wilson, E. (1992): The invisible flaneur. *New Left Review*, 191, 90-110.

Woolf, J. (1985): The invisible flaneuse: women and the literature of modernity. *Theory, Culture and Society*, 2, 37-48.

Young, I. 1990: The ideal of community and the politics of difference. In Nicholson, L., editor. *Feminism/postmodernism*. London: Routledge, 300-23.

解題（影山 穂波）

1970年代に登場したフェミニスト地理学は、性に基づく不平等、女性の抑圧に焦点をあて、女性を排除したこれまでの男性中心の学問動向に対する異議申し立てから発展してきた。本稿の筆者であるリンダ・マクドウェルは、このフェミニスト地理学の先駆者の一人である。彼女は、フェミニスト地理学の動向と、学会における女性の位置を展望し、さらにロンドンの労働市場における性別役割分業の実態に関する事例研究とともに社会構造の中での女性の地位を分析し、フェミニスト地理学研究を通して、政治的実践の指針となりうることを主張してきた。その中で本稿は、ジェンダ

一概念を基軸としたフェミニスト地理学の知的発達史を評価するとともに、フェミニズム研究の蓄積を鑑みて今後の展開を企図した試みである。

さて、フェミニズムが性に付随した権力関係を表現するための有効な分析概念として用いる、文化的・社会的性差、さらには肉体的差異に意味を付与する知を示すジェンダーという用語は、フェミニスト地理学においても鍵概念となっている。ジェンダーという用語は、精緻化されるにともない、男と女という各項を示すのではなく、男／女に分割する分割線、差異化そのものとしてとらえられるようになる。社会的・文化的性差を内面化する、すなわちジェンダー化するあらゆる事象をジェンダー概念で検討することは、そこに介在する権力関係を暴くことでもある。これは、ジェンダーとともに、階級、エスニシティなど、あらゆる差異化に通じる点である。

女性として抑圧される立場にありながら、白人ブルジョワとして抑圧する立場にもある筆者が身を持って感じたように、女性間の差異の理論的な検討が今後の研究課題となっている。そこで見いだされているのが、位置づけられた知、部分的な知である。この知は、部分的であるために客観的であり、実態のある場所からの人々の生活における主張となっている。そのため、固定化した地域の概念よりも、関係性において位置する結節点としての場所を分析していく試みに至る。こうした知は、フェミニズム研究の発展を促しているにも関わらず、地理学においては、十分に検討されていない。フェミニズムの知が地理学の知に与えるものが多くあるにも関わらず、それを看過している問題性は大きい。地理学の知の総体に関わるような本質・構築に対するフェミニズムの挑戦を受けて、地理学は、その知の体系を変更するのか、それとも再構築するのか？ 自らに問うている本稿は、地理学の現状に対する課題を鮮明に表した論文となっている。